



『わぁお〜とすっごい 感動中国』 大阪万博中国パビリオンにて展示



2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）
中国パビリオンの外観

中国パビリオンの内部。
手前のテーブルに『わぁお〜とすっごい
感動中国』が置かれている

今年春に日本僑報社から刊行した『わぁお〜とすっごい 感動中国』の著者である和中清氏（株式会社インフォーム代表取締役）を取材し、コメントをお寄せいただきました。

和中氏は1946年大阪で生まれ、同志社大学卒業後、監査法人や経営コンサルティング会社などを経て1985年に独立。1991年からは上海に事務所を置いて日本企

業への中国事業協力に取り組むとともに、多くの著作を発表するかたわら、上海への投資を紹介する「上海投資戦略」（インフォーム）を発表。自らも中国で販売会社を設立し、日本製品の直接販売事業を進めました。また、1994年には「上海ビジネス研究会」を設立するなど、長く日本企業への中国ビジネス教育を進めてきました。

主な著書に『愛と心のバレエ ユーラシアの懸け橋に

心を結ぶ芸術の力』(日本僑報社)、『中国市場の読み方』(明日香出版社)他多数。『奇跡 発展背後の中国経験』(中国・東方出版社)は国家シルクロード出版事業「外国人が書く中国」プロジェクトで傑出創作賞受賞。2023年、中国国際航空公司・人民網主催の「心に映る中国～日本人がとらえた中国フォトコンテスト」でエアチャイナ特別賞を受賞。

現在、“感動中国100”(kando-chugoku.net)にて、中国の秘境、自然からよりすぐりの100カ所紹介に取り組んでいます。

■和中清氏からのコメント

私の本格的な中国との関りは1991年から始まりました。当時、私の日本での仕事のクライアントであった日本の徳島県にあったアイリス社が上海浦東開発区の外資第1号で上海に進出したのが、私が中国と関わるきっかけになりました。

当時上海では、地下鉄1号線や高架橋の建設工事が始まり、上海の外灘から見えた浦東開発区の風景は、東方明珠塔の杭打ち工事だけでした。当時の中国ではまだ一部、物資の配給切符も残っていました。

90年代、天津で流通業や不動産業を経営する元南海大学教授だった実業家の知人に私は、大学教授から実業家に転身した動機を訪ねました。彼は「私が30年間働いて得る賃金と友人の香港の大学教授が1か月で得る賃金とが同じだったので……」とその動機を語ってくれました。その言葉が今も強く印象に残っています。

配給切符を手に行列し、自転車で多くの人々が職場に通っていた中国が、35年間で世界の人々が驚くべき変革を遂げました。90年代当時、日本では中国の社会主義市場経済を疑問視し、中国の改革や成長を否定的にとらえる意見が多数でした。

日本では中国の格差や社会的矛盾が、長年多くのメディアや知識人による中国批判の対象となりました。そんな意見に対して私は、日本のメディアや知識人の中国の見方、とらえ方の誤り、真実の中国のとらえ方を本やコラムで述べてきました。

中国に対する私の感動は、貧しかった中国が豊かになり、中国の成長を否定的に見ていた日本人も羨むような経済成長を果たしたことです。そして、日本人も世界の人々も、いまだに気づいていないのは、共に貧しかった

14億もの人々が豊かな生活を共に享受しはじめ、「先富」から「共同富裕」の領域に入りつつあることです。

日本の人口は1億少しです。それでも国の運営には多くの困難、矛盾、問題もあります。

中国の人口はその14倍。そんな14億もの人口の国が立派に経済成長を果たしたことに對し、私はただただ驚きと感銘を受けています。

私たち日本人は中国を脅威でとらえるのではなく、素直にその成長の事実を驚異と深い感銘を持って直視すべきだと思います。

14億もの人々が貧しさを克服して「共同富裕」に向かいつつあることは、“感動”以外の言葉では言い表せないと考えています。

そして何よりも感動は、驚異の成長が「平和主義」のもとになされたことです。

「平和主義」は現代中国の全てを包括する思想であり、中国人の想いであり、それが具現化したものが驚異の経済成長であると思います。

14億人もの巨大な人口の中国が「平和主義」を基礎に成長を果たした。これこそが私のみならず世界の人々が素直に感動すべき歴史的で偉大な出来事ではないかと思います。

習近平主席は「花が一輪咲いても春とは言えず、百花が一斉に咲き誇って初めて春がくる」と話されています。世界が共に咲き誇る道。中国は「平和共存」のもとに改革開放を進めてきたと思います。

日本では「中国の平和主義」に異を唱える人もいますが、そんな人に対して私は「ならば、なぜ多数の外資が中国に投資するのか」と問いかけています。ビジネスはそこに利益があるからこそ成り立つものですが、その利益が保障されるのは経済的要素の前に、まず「平和」です。

私は1991年からほぼ毎月、おそらく400回を超えたでしょう。毎月のように日本と中国を行き来して中国の隅々を訪問しました。

今から八年ほど前、私が丁度70歳になった時、雲南省の麗江から香格里拉(シャングリラ)を訪れました。その旅は、中国の自然の雄大さ、美しさ、街や村の素晴らしさに目覚める旅でした。

それから急かされるように新疆ウイグル自治区、四川省などを訪れ、その感動を日本人々と分かちあえたらと思い、「感動中国100」というホームページをつくり、

素晴らしい中国の自然、街や村を日本人に紹介してきました。

その「感動中国100」は今年、日本僑報社様の御尽力で『わぁお〜とすっごい 感動中国』という写真集の本として日本で出版され、関西・大阪万博の中国館に置いていただき来場者の皆様にご覧いただいています。

『わぁお〜とすっごい 感動中国』でも、中国パビリオンの展示テーマである“自然と調和した”美しい中国各地の街、村を紹介しています。

さらにこの本では、青海省の察爾汗（チャアルハン）塩湖、甘肅省張掖の七彩丹霞、新疆ウイグル自治区の喀納斯（カナス）湖、四川省の亜丁（ヤーティン）など、日本ではほとんど知られていない秘境を数多く紹介し、読者の皆様からは「中国にはこんなにすばらしいところがあったの、知らなかった」の声をいただいています。

その旅には多くの中国の人々との感動の出会いもあります。現地のチベット族の山ガイドと私と二人で山に登ったことも何度もあり、そのガイドの家に泊めてもらうなど、すばらしい感動の出会いの体験もありました。

甘肅省のツァガナ周辺には美しい岩山がたくさんありますが、現地のガイドと二人で山歩きをし、村の人と焚火を囲み楽しいひと時を過ごしました。山を歩いていると、三人の少年僧が持っていたお茶を飲んでくださいと言って私にくれました。

14億もの人々が「共同富裕」に向かっている、それこそが“感動”と述べましたが、新疆ウイグル自治区、四川省、雲南省、貴州省、内モンゴル自治区、吉林省、湖南省など、多くの地方の街や村を訪れ、現地の人々との交流を通じて「共同富裕」に向かっている中国を実体験しています。

世界の人々は間違った中国情報に惑わされることなく、もっと冷静に中国の実情を知り、35年前には共に貧しかった14億もの人々が今や、世界中に旅行し、平和共存のもとに「共同富裕」に向かっている、その事実に近い感銘を受けるべきではないかと思っています。

■第3回中友会出版文化賞受賞作

和中清著『わぁお〜とすっごい 感動中国』

行った！見た！驚いた！ 知られざる絶景の世界へと読者を誘う“写真で見る中国ツアー”

日本人の知らない中国の街や村、雄大な大自然など、数年にわたる中国秘境の旅の中で筆者が撮り続けてきた写真237枚を厳選し、感動の文で紹介。

情感あふれるフルカラー写真の数々を通して、悠久の歴史を感じさせる中国の風景に触れ、「中国にこんな素晴らしいところがあったのか、知らなかった！」という驚きと、「実際に中国に行って、この風景を見てみたい！」という旅情をかきたてる一冊。

四六判 96頁 フルカラー上製本

ISBN 978-4-86185-361-6

定価 2300円＋税



■同著者の関連著作『愛と心のバレエ ユーラシアの懸け橋に 心を結ぶ芸術の力』

松山バレエ団創始者松山樹子、その子息清水哲太郎、プリマバレリーナ森下洋子らの人生を追い、松山バレエ団の足跡をたどる一冊。

四六判 184頁 並製本

ISBN 978-4-86185-338-8

定価 2200円＋税





中友会会員による
中国滞在体験談

私の中国物語

「私の中国物語」その①

驚きの体験の連続であった中国滞在

衆議院議員 前国土交通大臣 赤羽 一嘉



2019年11月25日、中華人民共和国駐日本国大使館にて王毅外交部長と（写真提供：赤羽かずよし事務所）

私は、1987～90年にかけて、三井物産の社員として、①独身での北京駐在、②新婚での北京駐在、③単身での南京駐在を経験致しました。日中両国間の生活慣習、文化、経済活動上などの違いから、いずれも驚きの体験の連続でありました。

中でも、強烈な印象の日々は、最初の北京駐在でありました。私は、日本企業の駐在員の巣窟であった老ホテルの新橋飯店の冷蔵庫もない狭い一室に居を構え、友誼商店隣の国際大廈（CITIC）で勤務していました。

私は、台北で中国語を一年半みっちり学び、日常生活には何不自由ないまでに習得することができたと自信満々で北京に赴任したのでありますが、着任して1～2ヶ月は、面談時や電話での先方が話す中国語は全く聞き取れない状況が続き、これから先、まともな仕事をするのできるのだろうかと思々とした日々を過ごしておりました。が、ある日、突然、先方の中国語の意味を理解することが出来た瞬間に遭遇！……今でも、なぜ突然理解することができるようになったのか不明であり

ますが、当時の私にとって、一条の光が差した行幸そのものでありました。

私の担当業務は、中国産のトウモロコシや高粱、ごま等の買付でありましたので、原産地や積出港への出張も多く、実にタフな経験を致しました。着任早々の極寒の1月末に、北京から長春まで夜行列車の三段ベッド（硬臥）で18時間、到着は明け方5時。零下30度を下回る極寒の駅で、糧油総公司吉林省分公司の担当者が雪ダルマのようになりながら私を出迎えてくれ、夜行列車内での辛さが吹き飛んでしまいました。また、白酒を酌み交わし、一気飲みをする宴会は、楽しい雰囲気であるものの、苦行でもありました。その反面、原産地での工場内での食事は何度も経験しましたが、新鮮な食材を堪能できた上に、純朴な人々との交流もでき、私にとっては素晴らしい体験でした。

貿易については、当時の中国は「国際貿易の慣行」に習熟している状況とは言えず、数々のトラブルが発生し、頭を悩ませられました。例えば、年間契約したトウモロコシの買付価格より、出荷時の相場が高くなると、必ず荷が揃わないという理由で出荷を拒まれました。当方から、契約違反のペナルティを請求しても、「ないものほど強いものはない」状態で暖簾に腕押し。東京本社には、こうした実情はなかなか理解されず、その板挟みに、とてもつらい思いを致しました。しかしながら、こうした実態も、時の経過とともに改善され、国際貿易慣行に則った取引が行われるようになったと承知しています。

辛かった経験は、生活面でもかなりありました。友誼商店に買物に行っても、お喋りに忙しい服務員は一向に應對してくれない。應對しても、「没有、没有」の連発で、全く購入することができないことは日常茶飯事でした。タクシーもサービス業とは程遠い状況で、そもそも台数が少なく、日々の生活の足の確保は大変困りました。

また、新橋飯店も居心地が良い状況とは程遠く、日本の製品が珍しかったこともあって、私の留守中に、ホテルのスタッフが私の部屋のカセットテープを聴いたり、日本の週刊誌のグラビアを見たりしているような状況もあり、精神的に落ち着かない日々でもありました。

反面、新橋飯店には、当時の北京では珍しかった日本のラーメン店、居酒屋があり、その上、中国古来の上手な指圧も安価で受けられ、ささやかな楽しみもありました。また、同ホテルには、多くの日本の駐在員が滞在しており、その中で、都立青山高校ラグビー部の一学年上の主将であり、後に資生堂の国際部門のトップになられた岡沢雄先輩に偶然遭遇し、旧交を温めることができたのも懐かしい思い出です。

こうした日々を過ごす中でも、会社の先輩などを通じて、中国の友人もでき始め、休日には、一緒に、屋内サッカーをかなり本気モードで興じるなど、日中友好の

楽しい思い出を作ることでもできました。

あれから30年余り。現在の中国の発展ぶりは、同じ国なのかと頬をつねりたくなるほどの隔世の感があります。中国が世界有数の先進国になった今、国際社会には様々な課題が存在しますが、両国政府間の話合いのチャネルを堅持しつつ、国民相互の草の根レベルの環境・経済・文化・芸術・スポーツ・観光交流などを通し、確固たる日中友好の絆を強めていくことに、私自身も微力ながら尽力してまいります。

赤羽 一嘉（あかば かずよし）

1958年5月7日生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、三井物産株式会社勤務、台湾で語学研修。1987～90年にかけて、北京・南京に駐在。1993年衆議院初当選（当選9回）。1995年阪神淡路大震災で自身も被災。経済産業副大臣・原子力災害現地対策本部長、財務副大臣、衆院国土交通委員会委員長等を歴任。前国土交通相、公明党幹事長代行、公明党兵庫県本部代表。趣味・特技はラグビー（元全日本高校選抜）、中国語、絵画鑑賞。座右の銘は「一人立てるときに強きものは真正の勇者なり」「真実は現場にあり」。

「私の中国物語」その②

勝負より友好 ―囲碁交流、初訪中団記

九段棋士 清成 哲也

囲碁の歴史は古く、中国で生まれたのは3,000年以上も前の事とか。また日中囲碁交流の歴史も古く、古くは遣唐使の時代から、近代に於いても国交回復前から交流は盛んで、国交回復時「ピンポン外交が実った」と多く言われましたが、囲碁外交も大きな役割を果たしました。

私が読売新聞社主催の囲碁訪中団に加わせて頂いたのは1981年6月の事。当時19歳、六段だった私は、大変大きな刺激を受けたし、後に10回程訪中の機会は有りましたが、この時の思い出は強く鮮明に残っています。

訪中団は橋本昌二九段を団長に棋士7名。私は最年少でした。読売新聞社の瀬尾さん、それに若い通訳の王さん、女性の通訳、葉さんの10名で3週間に渡って中国各地を転戦し、中国棋士と7局ずつの対戦を行います。

最初の訪問地は北京。夕食会の前に中国の棋士から中国ルールと日本ルールの違いについて、詳しい説明を受けました。私達もルールの細かい点で違いが有るのは知っていましたが、全く知らない話もあり、皆感心し感謝した事です。

また自らの負けを認める「投了」の作法にも違いがあり、座敷での対局が主流だった日本では投了の合図とし



橋本昌二団長と私（黄山にて撮影）

て頭を下げ「負けました」と声を掛けます。対して中国では対局は椅子席。投了の際には椅子から立ち上がり相手に握手を求めます。この事も友好ムードを盛り上げた気がします。

また、通訳以外にも大変お世話して頂いた王さんは、団員皆と沢山お話ししたし、大変綺麗な日本語と余りに

博識な事に対して私に嫉妬心が芽生えた様で、ある時「王さん、立ちションという日本語をご存じですか？」「それは聞いた事有りませんね」「そうですか！」嬉々として解説した事、いくら半分子供だったとは言え、今思えば汗顔の至りです。

北京で2局の対戦を終え次の訪問地、安徽省合肥へ。安徽省の体育協会会長から日程等の説明を受ける。因みに中国では囲碁は体育に分類され、北京オリンピックの際に囲碁の試合も行われました。

「明日は対局。我が安徽省には中国三名山の一つ黄山が有り皆さんをご案内します。明後日、麓に移動し翌日も対局。その翌日に黄山へ登り2泊します」

この説明に瀬尾さんが青ざめる。私達は対局をしに来たんだ。観光に来た訳ではないと。

「麓まではバスで、たったの13時間。山登りは4時間半程を階段で登りますが、私も一緒に参りますのでご安心を」

橋本団長より遥か年上の会長に、そう言われては、瀬尾さんも退散するしか有りません。団長始め仕方ないな、という声が多かったが、私は楽しみで仕方有りませんでした。「麓まで、たった13時間」には、流石に広い国だけの事はあると、皆感心しきりでしたが。

対局の翌日、早朝からバスで移動。広大な景色の中をひた走る。途中、お手洗いを借りるのに民家の方と交渉する。パンなどの詰まったお弁当を1つ差し出すが、その座席の下の品は何だ？と言われビールも1本付ける事に。そうこうしている間に遠くから子供達が大勢集まって来て、物珍しそうに見ている。まるで宇宙人になった気分とは、ある団員の言葉。

最後の方は山を幾つも超えて夕刻、麓のホテルに到着。翌日の対局、皆に疲れた風は無く無事に終え、いよいよ翌日は登山。少し前に柔道の選手団が来たが日本人は2組目との事でした。対局を終えた中国選手も一緒ですが、皆さん黄山は初めて、との事。階段は真っ直ぐ登ると大変疲れるので、斜め斜めに登ると良い。その時教わった事で、今でも活用しています。10年後にはケーブルカーが出来る予定との事でしたが無事開通し、現在では楽に

登る事が出来るそうです。

色々な物を運ぶ人達が居て、中には天秤に掛けた袋に生きた子豚を乗せ2人して運ぶ人も。

途中、重そうな荷物を背負った女性に話し掛けられる。困った様子の私に気付いた王さんが来てくれたので通訳をお願いすると年齢は17歳。40kgの荷物を毎日運んでいる、との事。化粧っ気の全く無い、明るい笑顔は、本当に美しかった。

絵に描いたような水墨画の世界、時に「奇石」と呼ばれる不思議な光景を目にしながら、無事に一泊目もホテルに到着。広々とした平地が有り、鶏が走り回っていたのが、何故か強く記憶に残っています。

翌日は半日掛けて黄山の中を縦走し、夕刻前に山小屋に到着。一泊目のホテルが立派過ぎたので、こちらの方が山の気分を味わえた気がします。

夜、皆で外に出ると中国選手団と一緒にりましたが、日本語が堪能な棋士も多く、会話には困りません。何故か当時は日中の棋士が集まると恒例の腕相撲大会。力自慢の棋士が登場し双方、応援も賑やかい事です。最近覚えてたという「北国の春」を日本語で披露してくれた棋士もいて、楽しい夜は遅くまで続きました。

下山後、杭州、上海と転戦し帰国の途に就くまで、楽しい思い出も沢山出来ましたが、黄山での色々な経験は貴重ですし、今から経験出来るものでも無い事柄でしょうから尚更です。

成績はと言うと、全体では少し勝ち越しで橋本団長は中国のトップ棋士相手に貫録の全勝。私は3勝4敗の負け越しでしたが、当時の実力からすれば、妥当な所だったと思います。

因みに、この時の通訳の王さんは、現在の王毅外務大臣、その人です。

清成 哲也（きよなり てつや）

1961年宮崎県生まれ。小学校4年生の時に父から囲碁を教わる。1975年に上阪し倉橋正蔵八段に入門し内弟子に。1976年に入段（プロ入り）、1986年に九段昇段。タイトル獲得数2。1992年度NHK囲碁講座講師。1981年の初訪中以来、訪中数は10回程。囲碁に於いて日本が秀でいた時代から中国また韓国が力を付け、追い付き、追い越して行く様をこの目で見て体感して来た。

「私の中国物語」その③

私は隔離生活を通して成長しました

高校生 中ノ瀬 幸



ご近所の方からもらった品や、政府からの支給品。写真は
そのごく一部だが、隔離中に頂いたたくさんの食料で様々
な料理を食べて健康に過ごせた

上海市民一斉隔離。全世界で報道されたこの話題の当事者にあたる私が、皆さんに伝えます。この経験が私に与えた影響は、いつもの50日間では得られなかったものです。

隔離前、完全アウトドアの私の週末の定番は、上海の街並みを見ながら食べ歩きすることでした。当時上海は陽性者がほぼゼロ人の日々が続いていたので、その安心感から歩き回って歩き回って、上海の全てを知り尽くした気分でした。笑い声と活気に満ちた街を見て、コロナの完全な収束はひょっとしたら、すぐそこなのではという期待すら抱いていました。「人生何が起こるかかわからない」この言葉は全員に該当しますね。どの国のどの人にも該当するのです。

通達は突然来ました。同時に、事態が悪化し通勤できなくなることを恐れた父が、上海を離れました。静かな家で一人、ざわつく私の胸。その嫌な予感は当たり、そこから1日経つと1週間隔離期間が延びていく毎日が始まります。当初予定されていた5日間の隔離は、10倍以上の日数となりました。`期待しない、深く考えない`、毎日を乗り切るための方法としては限界があります。「日本各地がゴールデンウィークを満喫する人々で溢れかえっています！」そんな歓声がテレビから聞こえると、私の忍耐力は悲鳴を上げているようで、精神的にかなり

限界がきていることを感じました。

不安とストレスに覆われ真っ暗な毎日の中で光となったのは、隣人と家族。マンションチャットに1日何百件も送られてくる応援メッセージや、有り余るほどの差し入れと普段より充実した冷蔵庫は、まさに団結力を表していました。「まだ家に食べ物はある？」「何か困ったことがあれば、直ぐ言うんだよ。」管理人のおじさんにそう話しかけられた時、私の心のつかえは確かに、じわっと溶けました。あの時「没事，謝謝（大丈夫です、ありがとうございます）」としか言えなかったことを、今も悔やんでいます。この隔離が明けたら、防護服を脱いだおじさんに、もう一度お礼を伝えに行きたいです。「誰か助けてくれる、誰か見ていてくれる」という確信は、今まで感じたことがない心強さです。上海人の新しい一面を見て、上海には親切な人がたくさんいることを知って、不自由で苦しい思いをしているけれど、上海を嫌いにはなれないと思いました。

そして、私の一番の心の支えはやはり家族の応援でした。両親だけでなく、祖父母やいとも定期的にテレビ電話をかけてきてくれます。「人は一人では生きていけない」、それは精神面での事も指すのではないのでしょうか。この隔離期間に家事が大変だと涙したことは一度もありませんが、寂しくて不安で涙したことは何度もあります。こんなに日本が恋しくなったのは初めてでした。この恋しさは、外に出ることができない不自由からではなく、隔離が終わって、またいつもの日常が戻ってくる想像ができない怖さから来ていたのだらうと思います。でもそんな時、なぜか必ず彼らから連絡が来るんです。「何もしてあげられないけど……」と申し訳なさそうに呟く私の家族は、私にどれだけのことをしてくれたのか知りません。誰にも会えない毎日でも、自分を気に掛けてくれる人がいる有難さを、身にしみて感じました。

上海に復活の光が見え始めた今、私は家で一人、毎日色々なことを考えます。その中で私なりに辿り着いた結論と、今の思いを語ります。まず結論としては、`受け入れるしかない現実を受け入れる。とは、その現実の中で自分にとっての収穫を見つけること、もしくはその現

実を自分にとっての栄養に変えることです。`期待しない、深く考えない、`、それでは時間が過ぎるのをただ待つことしかできず、受け入れるという点では遠く及びません。

私は隔離生活を通して成長しました。

例えば、隔離前は洗濯機の回し方もわからなかった私が、今では服によって洗濯コースを使い分けます。一日も欠かさず三食自炊して料理の腕も上がり、立派な主婦になった気分です。きっと父が帰ってきたら驚くと思います。それよりも成長した部分は、精神面です。隔離生活の中で隣人と家族の温もりに触れ、人はなぜ他人の助けがないと生きられないのかを知りました。見えないと

ころで自分を支えてくれる人がいることに、気づいていきたいと思います。そんなことを考えていると、不思議と心に余裕が生まれ、ずっと胸が軽くなるのです。だから、目の前が真っ暗になってネガティブな感情が溢れそうになった時は、そうして自分を落ち着かせています。泣くことしかできなかった私が、自分の感情をコントロール出来るようになったことは、いつもの50日間では得られなかったはずの成長だと感じます。

この小さな家の中で、経験を重ね、感情と向き合い、私は大きく花開いています。

中ノ瀬 幸 (なかのせ みゆき)

2年半インドネシアの幼稚園に通い、その後は中学2年生まで熊本の学校に通う。2019年の春、中学3年生で上海日本人学校に転入。コロナの影響で2020年2月から11月まで熊本に一時帰国、初めての授業からオンライン授業だった。2020年12月、念願の登校をし教室で授業を受けるも、今年4月またオンライン授業の日々を経験することになった。

「私の中国物語」その④

茶畑の記憶

国家公務員 安部 憲明

霧煙の中、その村は遠く思われて、案外近くにあった。北京への辞令を受け、地図を机の上に広げてみた。この広い国を頭だけで理解するのはどう見ても無理がある。人々を取り巻く事情や行動原理は、日本で学ぶよりも多種多様で、はるかに複雑にちがいない。ここは単身赴任の身だ、国内に30余りある省や自治区などをすべて旅しよう、と心に決めた。現代中国が我々に見せる画一性と多様性、躍動と固執、虚栄と実利、したたかさと明朗さ、そして、旅先で姿が消えるまでずっと私に手を振り返してくれる異郷の人たちが抱える希望と苦悩―。無謀に思われた計画は、今回の浙江省への旅でやっと半数に達したことになる。

清明節を迎えた杭州は、浩然の気に満ちていた。この頃、中央では習近平指導部が「虎も蠅も」を合言葉に権力基盤を固め、「新常態」への転換に邁進していた。2年後にはこの地で、国の威信をかけてG20首脳会議が举行される。こうして北京が睥睨する視線を感じながらも、この旧都には、悠揚迫らぬ時の流れ中で涵養された文化交流や商業の遺風がある。蘇東坡や白居易も逍遙した西湖の傍らで、最近は、若い世代による文化芸術の刷新運動や起業家精神が旺盛だ。湖の柳を揺らすのは、古今東西



柔らかく瑞々しい若芽の手摘み。日々の生活の苦勞を、弾むおしゃべりで分かち合う女性たち

の文明や時代精神を呼吸して止まないこの街の巨大な肺活量ではないか。観光客で溢れる雑踏の店で自転車を借り、湖畔から山道を駆け上がり、私は龍井村を目指した。

私の家系は代々、静岡の川根という土地で茶業を営む。八十八夜が近づくと、結婚し家業を離れた母は父と私を伴い帰省し、実家で最繁期の摘茶を手伝うのが年中行事だった。かくして「茶摘み」が、都会っ子の歳時記に加

わった。新茶は、たった1日の天候が1年間の苦勞の成果を左右する。都会にはない、自然と人間の理屈抜きの厳しい関わり合いがあることを知った。実際、この時期の大人たちは人が変わる。日が昇らぬうちに弁当を抱え山に出たきり、茶畑と茶部屋（作業場）を何度も往復して日が暮れる。一息つくはずの夕べの食卓でも、遅霜や大雨の予報に気を揉む。昼夜分かつた陰しい親や親戚の顔を、子供たちは戦慄して遠巻きに見つめるだけだ。「戦力外」の私たちは、毎朝床から出て布団を干し、それが終わると、がらんとした薄暗い広間や土間で遊び、本を読み、飽きると河原に下りた。

そんな中、働きに出ても祖母だけは、忙しいはずなのに時々遠くから畦道をにこにこ歩いて来て「お留守番は大変だ。えらいえらい」と汗を拭きふき、孫らの頭をなでてくれた。1週間ほど居て帰京の時には「のりちゃん、もう帰る。次いつ来る。いい子だっけね。本でも読みな」としわくちの掌に柔らかいお札を畳んでくれた。学生になっても「のりちゃんは、がんばり屋だ。でも、無理はしな」とそっとチリ紙の包みを渡された。

小径に入り、市巷から数珠繋ぎだった車のエンジン音が急に遠ざかる。自転車降り、村の名が由来する井戸を過ぎると、乳白色の霧が覆う山間に石垣が見え、家々が現れた。蒸した茶の香りが谷に満ち、鼻腔の記憶を刺激した。その瞬間だ、幼い頃の川根の情景が目前に広がったのは。急斜面の茶樹の列、足元を洗う清流の冷気、鶏の鳴き声、どこかの作業場で回転する乾燥機のリズム。農具は、今は川根の納屋で眠る代物ばかりだ。男衆は、ずっしり重い茶かごを背負い畝を行き交う。女衆は、腰の高さの枝から新芽を手際よく摘みながら、おしゃべ

りが絶えない。老人たちは、瓦屋根の軒先に並んだ竹製の大ザルに蒸したての茶葉を広げる。村を貫く一本道では、幼な子らが鬼ごっこをして誰かが転ぶ。泣く男子の膝頭を、おんぶひもを巻いた年長の娘が拭いている。私は、四十有余年前に見た祖母の土地、母の郷里をそこに見ていた。きっともうじき夏が来れば、龍井の子たちもあの林の裏に這い出す沢蟹を採りに行くのだろう。秋の男たちは腰を折って薪を割り、山の上の炭小屋で寝ずの番に違いない。冬、女たちの朝餉の支度や洗濯はさぞ辛かろう。ふと、祖母が向こうの角からひょいとして出て来そうな気がした。「のりちゃん、中国はほんとうに広いぞらよ。でも、人のうれしいかなしいの気持ちは、どこも同じだね」

祖母は、私の中国勤務を知らずに逝った。川根の村が氷雨で煙り、梅がほころぶ日だった。葬儀に集まった男孫みなで棺を担ぎ、何度も回りながら庭先の土を踏んだ。龍井では、どのように死者を弔うのだろうか。

五感が遠い記憶を呼び覚ました旅は、茶葉を営む人々の生活や習俗、技術や道具が、両国で連綿と受け継がれていることを私の心に確かに告げた。

西湖龍井の銘柄は、釜に押しつけられ扁平形で壺に詰められる。市街に戻る道すがら、小さな茶店に立ち寄った。湯を注がれ、杯の中で萌黄色の華奢な姿に戻り静かに揺蕩う茶葉と一緒に、幼き日の私の遠い記憶の断片もゆっくりと沈んでいった。

安部 憲明（あべのりあき）

静岡県出身。大井川鉄道のSL終点の千頭（せんず）で生を享ける。海外は米国、中国、フランスで勤務。2013～15年、チベット自治区を除くすべての省・自治区等を出張や旅行で訪問。論文に『経済協力開発機構（OECD）と中国の協力強化：居心地の良い現状均衡とグローバル・ガバナンス上の課題』北海道大学「年報公共政策学」第13号など。



『習近平 中国式現代化（日本語版）』発刊記念式と「グローバル発展に関する中国の方案」シンポジウムが、6月19日（木）、東京にて開催されました。

（左写真）第13回「中国人の日本語作文コンクール」大使賞受賞者の宋妍さん（左）と鳩山由紀夫元首相（右）のツーショット。

（中央写真）左から段躍中編集長、近藤昭一衆議院議員、林家三平中友会会長。

（右写真）会場での集合写真。右端が段躍中編集長。

（2025年6月19日撮影）